令和5年度 第3回 知事広聴「平太さんと語ろう」記録

【日時】令和5年11月15日（水）
午後1時30分～午後3時
【会場】南伊豆町役場湯けむりホール

1 出席者

発言者：下田市・南伊豆町において様々な分野で活躍中の方 4名

2 発言意見

番号	分野	項　　目	頁
発言者1	商業・観光	民泊等の清掃・管理運営業務における課題と取組	3
発言者2	商業・観光	観光地のすし職人の今後に向けた展開	5
発言者3	商業・コミュニティ	アパレルブランドを活用した伊豆の活性化	10
発言者4	地域振興	地域おこし協力隊の活動と今後の展望	13
傍聴者1	―	県内のウミガメ保護団体の活動手法について	20
傍聴者2	―	障害者の移動に関する要望	22
傍聴者3	―	下田市内の通学路の安全確保と給食無償化	22

【川勝知事】こんにちは。本日は足元の悪い中、お運びいただきまして誠にありがとうございます。

今日は、この南伊豆町役場湯けむりホールを御手配いただきまして、岡部町長御自身も御同席いただき誠に恐縮でございます。ありがとうございます。

昨日よりこちらに来ておりまして、南伊豆町、そして下田の見るべきところを見せていただいて、今に至っております。

印象的だったのがですね、昨日、下田市の4つの中学が1つになって、ちょうど1年余り経つんですけども、うまくいってるかなと思ってすごく心配していたんです。

400 人以上の新しい下田中学校が敷根の公園の上のところに開校いたしまして、新校舎もできて、そこにロータリーもあってそこがバスのターミナルになっていて、入った途端にですね、いや、そこに車を降りた途端に「こんにちは」と、もう皆さんがですね、明るくてすごい良い校風ができてるなと思いました。そして生徒会の会長さん、役員の方々、生徒さんとお話をしたんですけど、クラブ活動が大変盛んでですね、かつてなかった野球部もできたとか、あるいはサーフィン部ができて、そのサーフィン部はこれは日本では2つ目だっていうわけです。これは宮崎に1つあります。そして、こちらにもう1つあってですね、そしてもう日本最高の指導者が、そのサーフィンのクラブの少年少女たちを指導してるっていうんですね。

それだけじゃなくてですね、サーフィンのクラブができるってことがわかった市外の人たち、あるいは県外の方たちがですね、移住してくれてるんですよ。びっくりしました。御両親がですね、こちらに移住する決意をされたという。

だからここはですね、いずれサーフィンが、これはオリンピック種目にもなってますから、ここからそういう人たちが必ず出るし、日本でもJリーグだとかVリーグだとかありますけれども、サーフィンのですね、Sリーグなどが出てくるんじゃないかと。そのときにここがそのメッカになっていくんではないかという予感を感じました。

それから南伊豆では、東京大学があるわけですね。東京大学が 250 ヘクタールの土地を持っていると。そこで例えばユーカリの森があるから見てくれって言うんですけどね、もうこのぐらいの大きさです。ユーカリはですね、ウッドデッキなんかにも使えるし、とても硬いんですよ。しかもすごく急速に伸びますから、いろんな形で使えるなと。250 ヘクタールありますから、あれは潜在的にすごい財産だなというふうにお話しした次第です。

先ほどここに来る前に、ドローンという空中を飛んでいろんな所の写真を撮るという、それのですね、日本最高の技術を持っている所が、南伊豆の認定こども園の前に小学校だった所、そこに

移住してきてましてですね、空、海、陸全部の練習訓練ができるインストラクターが来てまして、元々富士通に働いておられた技術者の方で、その方が独立して会社を起こされました。しかもここでですね、気に入ってるんです。何と言ってもすぐそばがですね、もう海でしょう、弓ヶ浜でしょう、そしてきれいでしょう。そこで実験もできるでしょう、人助けもできるでしょう。

ですから、ここはですね、ドローンのインストラクターを作るメッカにもなるなあと思ったりもしてまいりました。

今日はですね、私の尊敬する2人の首長さん、先ほどの岡部町長さん、もう岡部さんになられてからですね、ばんばんばんばん新しいことをされてることで、めくるめくようなすごいなっていうその力を感じてますが、もう一方、私が尊敬する後輩って呼んでるんですけど、大学の後輩でですね、すごい男が出たと、しかも県庁から出たっていうことで、もうエースが出たと思った松木市長が今日ここに来られております。

ちなみに昨日下田ではですね、芸妓さんにお目にかかりまして、またあの川端康成が泊まったという甲州屋にも寄っていって、きれいな方がそこでですね、管理されてるってことですね。

本当にスポーツから、それから新しい技術から東京大学というブランドを持っている、そういう250 ヘクタールのところからありまして、かつですね、下田のこの海岸線が 47 キロぐらいあるんですね、下田市だけで。これ南伊豆だけで 57 キロあります。足せば 104 キロですよ。静岡県全体で 500 キロちょっとです。ですから5分の1が実はこれ、ここにあるわけです。

かつては津々浦々でですね、この黒潮に乗って流されて、ここで漂着して、そして都の文化を伝えたその人たちの名前がですね、賀茂郡という賀茂とかですね、あるいは一條とか二條とか、そういうふうに残ってますね。

ここはですね、隠された宝庫だと。そして海に開かれていると。ただ不便なのは道路だということでありましたけれども、ここに私が尊敬する 40 年以上立派な仕事をされてこられ、このたび勇退されました森竹治郎さんというですね、早稲田の先輩がいまして、この方の獅子奮迅の活躍によりまして、昨年3月、伊豆縦貫自動車道の河津七滝インターチェンジから河津逆川インターチェンジ間が開通しました。やがてこれがですね、伊豆縦貫自動車道は、沼津市から下田市まで直線で約60 キロですから、42．195キロを2時間ちょっとで走る人がいるわけでしょ、60 キロだったら3時間あったら走れるわけですよ。それが今はですね、ちょっと不便だということで、これをしっかりやっていくということが私に残されてる課題です。

ちょっと話が長くなりましたけれども、今日は森さんも来られてる。

それからですね、安藤さんじゃないかな、安藤さんいらっしゃる。あの人 10 年前にここで会ったんですよ。それで福島がやられたでしょ。そしてその時にですね、励ますって言うんで、桜の木を植えて、その時だけやってるかと思ったら 10 年ずっと続けてる、こういう人がいますよ。最近（町議選で）トップ当選を取ったってことで、いやおめでとうございました。こういう人を生んでるところだということですね。立派なものです。ありがとうございます。御活躍くださいませ。

今日はですね、私は今だけ喋りまして、あとは南伊豆町と、それから下田市が選んだエースおふたりずつのお話をしっかりお聞きしてですね、それを南伊豆町、下田、賀茂地域、さらに県政のために生かしていきたいと。聞きっぱなしはありません。

意思決定者並びに部局のトップが来ておりまして、私がここで答えられないことは必ずお答えすると。この広聴会は 82 回やってますが、これまで聞きっぱなしは1つもありません。そういう大事な会でございますので、今日はこちらの4人のエースの方々のお話を承りまして、しかもここの町長さん、市長さんが御同席されております。議員の方々もいらっしゃるということでございますので、堂々と思い切ってですね、言いたいことは全部言っていただくと。それを私は楽しみにしておりますので、どうぞ皆様方よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

【発言者1】座ったまま失礼します。発言者1と申します。よろしくお願いします。

クリーニングと言うと、衣装などをきれいにするクリーニング業と思われる方も多いのですが、弊社は施設の清掃をする業者です。

清掃業は、職業差別を受けたり、誰でもできる、けどやりたくないと思われたりすることも多い職種です。時代や状況が日々めまぐるしく変わる中で、下田で暮らす人、この土地に訪れる人、どちらも気持ちが豊かに過ごせる環境を清掃業の今までにない形で作り上げたいと開業して、今月で3年目になります。

私は学歴もなく、パソコンのスキルもなく、英語も話せないですし、県内に頼れる親戚もおらず、核家族で子育て中の普通の主婦です。それでもこの土地で仕事をして、しっかり何より稼ぎたいと思っています。今はまだまだ未熟ですが、清掃業の価値がもっと認められて、従事してくれている仲間たちとみんなで、この清掃の仕事でいつか日の目を見たいと思っています。

弊社では2つの部門に分けて営業しています。民泊などの宿泊施設や別荘の管理清掃と、エアコンクリーニングや換気扇の分解清掃など技術的な清掃をする不動産物件の清掃メンテナンスです。

現在は、パート・アルバイトスタッフさんが13名在籍してくれています。月1回から週5～6回とシフトの自由度は高いです。その他に県外のリモートスタッフさんや複数の協力業者さんの力も借りています。在籍しているスタッフのほとんどが下田、南伊豆で暮らす“地の人”であるということが弊社の最大の強みとなっています。

現在弊社では、2つの課題に取り組んでいます。

1つは、環境問題についてです。私たち清掃業はごみにとても近い場所で仕事をしています。たった一度の宿泊でも各施設で出るごみの量はとても多く、使用される消耗品も大量です。気軽に快適に過ごす裏側には、たくさんのごみとたくさんの無駄遣いが存在しています。これを黙って見過ごしていたらいけないなと、単純にそう思いました。

会社を経営していると、利益を重視していきたいけれど、それ以上に気持ちや取組がきれいでないと胸を張って清掃業としてやっていけないと思っています。ごみに近い場所で働く私がまずできることからと、環境に配慮した宿泊施設用のアメニティ用品や消耗品の販売を始めることにしました。

下田では手に入りにくかったおしゃれなエコアメニティを、弊社で大量ロットで仕入れて量り売り販売し、気軽に導入しやすい価格帯にしました。弊社清掃担当施設では、消耗品の仕入れ、設置、在庫管理までの一本化で業務の効率化を図り、環境に優しいエコアメニティを取り入れやすいようにしました。小規模な施設や近隣飲食店も購入可能です。賛同してくれる施設が増えたら、将来、下田ブランドのオリジナルエコアメニティも作りたいと考えています。

不動産メンテナンス清掃では、清掃以上リフォーム未満の住宅再生クリーニングという技術を学び、清掃の力でキッチン、浴室、トイレ、鏡などできる限り新品の状態に近くなるまでによみがえらせ、買い換えるのではなく長くきれいに使い、廃棄物を減らせるように取り組んでいます。この技術はまだまだ未熟で、現在も勉強中です。

2つ目の課題は人手不足です。ありがたいことに、清掃の御依頼や御相談をたくさんいただき、担当させていただきたい施設がどんどん増えていきます。そのスピードと比例してスタッフを増やすのはとても難しく、需要と供給のバランスに悩むことが多くあります。

特に観光地である下田の繁忙期は、当日の決まった時間にスタッフが全員稼働しても足りないくらいの仕事量になります。SNSやLINEなどを活用し、子供が小さい、副業であるなどの事情があっても、働きやすいシフト受け入れを取り組んだり、隙間時間で単発で働く求人募集サイトを利用したりして何とか乗り越えていますが、今後も大きな課題であります。将来は外国人の方の雇

用も視野に入れています。

そして、現在力を入れているのが宿泊施設運営代行です。空き家の活用を考えている、別荘の有効的な運用を考えている、民泊をやりたいがどうしていいかわからない、現在営業している宿泊施設の売り上げがうまく伸ばせない、などの話を本当に多くよく聞きます。

私たちは、それぞれ違うオーナー様や会社の運営する宿泊施設の現地清掃管理の御依頼をいただき、宿泊施設に何十回、何百回と出入りしています。宿泊業の要である清掃から培った技術と知識、情報量を生かし、伊豆半島で多数の宿泊施設運営代行経験のある民泊運営代行専門スタッフを強みに、オーナー様の意向に寄り添い、施設を生かし、建物の価値を高める宿泊施設の運営代行もしています。

清掃からもう一歩出た宿泊施設運営まで自社で請け負うことにより、清掃作業自体の効率化や、働くスタッフの業務内容の選択肢の幅を広げることができます。可能性の広がりを伝えて、離職率を下げるとともに、少しでもこの会社に勤めてみたいと思う人を増やしていきたいと思っています。

最後に、この清掃業はワーケーションやデュアルライフ、エコツーリズム、グローバルプロジェクト、そして高齢化の全ての受け皿として重要であり、需要のある仕事だと思っています。だからこそ、この土地に暮らす人たちが満足度高く働くことができて、この土地に訪れる人たちも満足度高くまた来てくれる、そのサイクルが地球環境にも優しく継続し続けられる仕組みであるように取り組んでいこうと思っています。

最後に、言いたいことがあるときは言ってねと言っていただいたので、是非この機会にお話しさせていただきたいと思うんですけど、ごみに近い清掃業の我々の仕事は、華やかな仕事の受け皿として、なかなか皆様の目が届かないところでやっています。何か仕組みで、受け皿で働いている私たちがより働きやすいように、例えば主婦の人たちや、事情があって短時間しか働けないけど技術を持っていたり、力を持っている人が働きやすい仕組みができたら嬉しいなと思っています。

皆様の御近所でこのエプロンを見かけることもあるかと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。

【発言者2】下田市で、すし職人をしております発言者2と申します。私はですね、高校卒業してからずっとおすしのことしかやってこなかったので、難しいことはわからないんですけども、さっき知事から代表としていろいろ質問してくださいみたいなこと言われたんですけど、事前に言われてる

から、ない知恵を絞って準備したんですけども、それができなかったもんで、今回は代わりに後で会場の皆さんにマイクが行くって聞いてるんで、今日は先輩方が見に来ているので代わりに質問してください。お願いします。

私はですね、下田市で3代続く、すし屋の跡取りなんですけれども、先ほど発言者1さんがおっしゃってた地域課題とすごい近い部分を感じていて、長くこれから続けていくには、先ほどのキーワードで出てきましたけれども、しっかり稼げるっていうところが持続可能なサービスを提供する上で必要なのかなって考えています。やっぱり土地柄、繁忙期と閑散期の差が大きいよとかっていう話はよく耳にします。繁忙期はいいんですけど、閑散期にどういう商売をするかということを課題に感じている飲食店やサービス業は多くいると思います。

その中でですね、私は地方創生起業支援金という静岡県の補助金制度に採択していただきまして、ケータリングサービスを始めました。多分ですけれども静岡県では袋井市の方でケータリング専門でやっているところがあるんですが、そこだけなのかなと思います。

こちらターゲット層はいろいろあるんですけども、一つは先ほどの閑散期の時期に、ケータリングということで、会場にネタとシャリをお持ちしてその場で握るというスタイルでやらせていただいてるんですけども、お祝いごとであったり、イベントごとに呼ばれることが多いです。

例えばですね、誕生日なんかのお祝いごとであれば 365 日あるわけですから、そういったところで閑散期にも、お祝いごとでおすし屋さん呼んでみたいなって人に向けて、サービスを提供できるんじゃないかなと思っております。

その他にケータリングでできること、明日も実は東京でケータリングが入ってるんですけど、コースの中にこういった下田市の須崎で採れたテングサを使ったところてんですとか、外浦の海水を使って作っています塩、こちらをお持ちして、下田市にある食材を持っていくことによってPRができるということも考えています。

今の時代、SNSなんかで表向きにPRということもあると思うんです。なかなかそういった飛び道具というよりは、直接こうやって持っていって食べてもらうことができるのは一つまた強みというか、下田市としてPRできると思っております。

あとはですね、繁忙期のときに特になんですけど、どこもね、ちっちゃいお店が多いです。なかなか入れなかったりとか予約で一杯ですみたいなことは結構あって、行っても何時間待たされましたみたいなことっていうのはしようがないというか、観光客数と飲食店の数のバランス的になかなか難しいなと思っていて、その中でもゆっくり食事がしたい人に向けてケータリングを提供することに

よって、職人で、僕ですけど1人で行きますのでゆっくりしたいって方。あとはですね、高齢者なんか、お店に行きたくても行けないよっていう人であるとか、小さいお子さんがいるのでなかなかおすし屋さんとかに行けないっていう方にも喜ばれております。

ケータリングをやる中で、すしをちょっと握ってみたいよって人がいます。

そんな人の中にですね、すしを教えて、ちょっと楽しんでもらうっていうのをやったりとかですね、(スライド)左下のイベント、こちらは米国大使館の方々なんですけど、文化体験ということで、すし体験をしてもらったときの写真になります。

人材育成に関しては、これからの事業なのでちょっとさわりだけにするんですけど、そういった体験をした中で、その中から1人でもちょっと興味持ってもらって、仕事にしてくれる人が増えたら、すし屋も減っている状況ではあるんですけども、下田市はやっぱり港町ということで、魚を食べたい、すしを食べたいっていうお客さんは多いんじゃないかなと思います。そういう人に向けて、下田市、僕だけじゃなくていろんな人が維持継承できればいいなと思って、下田市ではまだまだ若手とされてますけども、同時に下の世代を育てていくようなこともしていきたいなと考えております。

この後、発言者1さんの話でも出たんですけど、ごみ問題で取り組んでることが2つあります。1つはですね、すし屋、僕らの仕事で出た魚のアラとか、こういった貝殻ですね、(現物を見せながら)これアワビなんですけども、それを焼いて砕いて餌に混ぜたりしています。天然の餌にこだわっている養鶏場さんなので、魚も天然のものにこだわって、うちで出るアラを使ってもらってます。

これでですね、少なくても 50 キロぐらい、多いと 100 キロを超えるごみが、ごみだったものがこうやって養鶏の鶏たちの餌となって、それで育った鶏たちの卵を使って、玉子焼にする。伊豆ブルーとややこしいんですけど、「下田ブルー」という卵で青い卵です。すごい栄養価が増えるっていうのが、オメガ3が普通の卵の4倍含まれてるよっていう卵です。

あと、こちらのプロギングっていうのをやってます。プロギング静岡というのがあって、今 11 市町に代表リーダーがいて各地域でやっていて、下田市はですね、ビーチも多いので、ビーチ周辺には各団体さんがいてビーチクリーンやってくれてるっていうのが多いんですけども、なかなか街中やってる人はいないだろうなということで、街中に店舗を構える店として、観光客がやっぱりきれいな街を観光する方がいいと思いますし、その方が当然我々にもメリットがあるということで街中をきれいにするということをやっております。

自分の話は以上になるんですけれども、せっかく平太さんと話す会っていうことでですね、昨日ちょうど飲んでたんですけども、その中でやっぱりどうしても地元のことに話がなる。やっぱみんな

地元愛がすごいななんて感じるんですけども、新しいことをどんどんトライしていく層がいる中で、なかなかその過疎地というか、そういう土地で長く暮らしてた人たちはあまり変化を好まないというか。

そうやってやっていく中でこういう下田というか過疎地というか同じような地域があると思いますけども、これからどういうふうな方向で、民間なのか行政なのかわかんないんですけど、手段をとって生存していくべきなのかなというのはちょっと御意見いただければなと思います。

以上です。よろしくお願いします。

【川勝知事】おふたりとも下田をベースにして活躍されてる方でですね、こういう方たちを励ますことが、あるいは足を引っ張らないことがですね、一番重要だと思います。

今日は先輩がですね、発言者2さんの先輩が来ておられると、おそらく発言者1さんの会社の方もいらっしゃるかもしれません。ともかくですね、こういう人たちを励ましていくっていうのは、まず大事ですね。

松木市長さんって人はですね、そういう人です。ともかく新しい変化の時代の流れを捉えて、それを推進していく青年たちを応援したい、だからこの2人が選ばれたんじゃないかと思いますね。

通常クリーニングって言うと、お洋服とかワイシャツとかのクリーニングってイメージですけど、全く違うイメージでですね、発言者1さんは言ってみればニッチっていうか、こういうこともできるんじゃないかということで、下田の施設とか民宿とかそういうところのクリーニングをやってみたらってことで。それは、どうしてそうお思いになれたかっていうと、私はですね、南伊豆も下田も、景色がきれいだからではないかと思います。だから汚いままほっとくわけにいかないというふうに思われたんでしょう。ですから、この施設のクリーニングをしていくんだという、そういう話ですね。そしてそのうちにですね、やっていくうちに、リノベーションはやらないけど、これどのようにずっと維持できるかということで、ここにこういうアメニティグッズがあるといいっていうことで、もう既に新しい事業に乗り出されてるじゃありませんか。きれいにする美化運動だけではなくてですね。しかも、その働くのは、朝9時から5時とかと違うでしょう。いつでもフレックスタイムといいますか、使えると。今 13 人で足りないとおっしゃったわけですね。ですからですね、これはPRとすれば、もうこれはそういうことやりたい人、お子さんを育てていて学校行ってる間はやりたいとか、あるいは夕刻、時間が空くんでやりたいとか、それぞれのお立場に応じて、南伊豆の方たちも一緒になってやってらっしゃるってことですから、いろんな人がこの働く現場に一旦入ってですね、最初、皆でみたいなこと

をやりながら、そしてそれが報酬に結びつきますのでね、稼げるわけです。

ですからそういうことで、賀茂地域局長がですね、もうこれから宣伝に相務めるということでございます。

特に環境を大事にしたいとおっしゃってるので、これは地球環境全体をきれいにしていこうという、そういう話ですね。

これが発言者2さんの話でも関わる話だと思うんですけども、明日東京に出て行くんですって、ケータリングで。ですからですね、東京で10年余り、修業せられたそのネットワークと、それから老舗すし店の伝統の味ですね。これは知ってる人はもう知ってると先代からずっとそのお店でですね、そこのあれがうまいという、ネタはいい。そしてこの方ですね、今すし職人の正装をされてるでしょう。さっきランチ一緒に食べたんですよ。これを汚れちゃいけないと途中脱がれましてですね、そしたら下は半袖のシャツです。この自分のこの仕事着はですね、ここで人前にさらすときに、例えばおしょうゆとか何かついちゃいけないんだと。この粋の良さ、それからですね、この仕事着に対してかけてる思いの強さっていうのをですね、出しましたよ。素晴らしい青年だと。おいくつでしたっけ。

【発言者2】32です。

【川勝知事】32だそうですよ。楽しみですね。

そういう人でしかもこの卵ですか、鶏が食べてる餌に、使った貝殻を砕いてですね、それを餌にしてやるっていう、これ文字どおり循環じゃないですか。

ですからこの下田や南伊豆をきれいにしていこう、そして無駄に出さないと。環境、これをやるのにですね、資源の無駄遣いをしない、有効利用していこうと。それをちゃんと、それは素晴らしいねって言ってそれを買ってくれる人がいるっていうですね、その生産物をまたいただいて、最後に卵をいただくという。こういう循環ができてるということでですね、下田の未来は万全だなと思ったわけですが、農閑期と農繁期どうするかっていう、この大問題がありますが、これは忙しいときにはもう繁忙期はすごいですけれども、いわゆる暇なときですね、この波をどうしていくかと。元々日本は農業は田植えから、それからその雑草刈りから、それからあの、最後の収穫は本当に忙しいですけどそれ以外は暇じゃないですか。

そのときに副業というようなものを考えたと。ですからおそらく発言者2さんもですね、このすし

をどう握るかっていう面白さを伝えたいということで、仕事にし、本当のすし職人としてやるのはなかなか大変な修行ですけど、それの卵をですね、やらせてみたらというお考えをお持ちのようで、副業の職人ですか、何ていうの、そういうの。

【発言者2】副業ですね。

【川勝知事】副業とおっしゃる、つまりそれは本職にしないけれども、いざというときには家族のために何か握ってあげられますよと、あるいは彼の助手になりますよという、そういう人をですね、下田中学とかねその辺りですね。

それからお米もですね、愛国米っていうのあるじゃないですか。あれはあのコシヒカリなんかの元々の原点ですね、それがさらに品種改良されて日本を代表するお米になってるんですよ。

その愛国米はこちらで作ってますでしょ。それを使って、ものすごい美味しいお酒になってるの御存じですか。「身上起」っていうんですよ。これを飲んだら他のお酒は飲めないですね。

それぐらいだから、シャリがうまい、ネタがいい、腕がいいと。そしてその地元のものを使ってると。十分に使い切って、そして食べに来た人たちが泊まった後残していくごみを、どのようにきれいにしていくか、その人たちが気持ちよく過ごせるためのこういうグッズがあった方がいいっていう。この制服ですね、この2人とも制服着て今日は出てきましたけど、この2人、特にこの発言者1さんのクリーニングがまだ今知られてないので、もう今日ここにいらっしゃる方はですね、このクリーニング人手不足で困ってるんだと、1日1時間ぐらいでもやってみたらって言って、それでですね、応募が引きも切らなくて、面接するのが大変だというふうになるんだったらいいなと。賀茂地域局長、よろしくお願いします。

そういうようなことでですね、しっかりとした宿題をいただきまして実行可能な話でございますので、それを実行していきたいと思います。

ありがとうございました、おふたりとも。

【発言者3】発言者3と申します。よろしくお願いします。

このたびはこのような機会をいただきまして、町の方に感謝申し上げます。ありがとうございます。

地元の方はもう御存じだと思うんですけど、一応少し私の自己紹介をさせていただきたいと思

います。生まれは実は埼玉県でして、育ちは南伊豆町です。小学校1年生のときに父の実家の南伊豆町へ引っ越してまいりました。小・中・高と地元の学校に通って、高校卒業後は地元で就職をしました。結婚を機に5年間、静岡市の清水区へ行き、5年生活をして 13 年前に地元の南伊豆町へ娘1人と戻り、現在、シングルマザーとして中学校2年生の娘を育てながら、両親とともに南伊豆町の実家に住んでおります。

本業はですね、仕事は建設業 10 年目になりまして、現在は南伊豆町の建設会社の総務部として、現場管理とあと経理を3割、総務7割といった感じで8年目を迎えています。

ちょっと緊張してます。

で、副業で南伊豆町発信のアパレルブランドとして、IZUBLUEを中心とした個人事業を 2021 年に立ち上げ3年目です。

こちらはアパレル関係の製作と、民泊物件管理の事業の展開をしております。

本業はですね、副業が可能ということで私のダブルワークを御理解いただきながら、好きにやらせてもらってることに本当に感謝しています。

アパレルブランドのIZUBLUEですが、南伊豆町発信ということで、今年の 7 月で3年目を迎えました。県内の方だったりとか、地元の方にもたくさん御購入いただいて、このIZUBLUEというワードがですね、伊豆に人を引き寄せることができるワードだと思ってずっと自分の中で、SNS上で使ったりとかしながら、ずっと思ってたんですけど。IZUBLUEって伊豆の空とか海とかを連想するワードだと私は思って、このワードで私が育った地元のために何かできないかなって考えたときに、高校を卒業をしたときに、卒業後に下田のアパレルショップで働きまして、知識を得たので、自分の好きな服で、南伊豆町発信のアパレルブランドを製作してみたらどうかなっていうところで、ちょっと作ってみたんですね。

3年前のコロナ禍のときに地元なのに地元に帰れないとか、あと伊豆が好きなのに伊豆に行けないとか、そういう声をたくさん聞きまして、地元から離れた方や南伊豆町を好きな方にもいつでも伊豆を感じて過ごしてほしいっていう気持ちを込めて立ち上げました。

今日着てる私のこのTシャツの白と紺色を地元の方に販売したところ、爆発的と、自分の中ではすごい売れて、なおかつその方たちがSNS上ですごい広めてくださって、自分が予想する以上にすごく売れていくのを見て、やっぱりこれはいけるっていうふうに思いまして。そこで本格的にちょっとやっていこうって思い現在に至るんですけど。

IZUBLUEの商品を送るときに、伊豆の空と海を身近に感じられる身近なアイテムをお届けしま

すっていう形でコメントの入ったショップカードを入れて、初めての方に発送する形で今送らせてもらっています。

普段は本職があるため時間外での製作で、土日での対応とか、SNSのみの発信でコミュニケーションはお客様とはDMっていうメッセージとか、そういうのでずっとやってる状態なんですけど、アイテムの販売は、ネット販売と南伊豆の自宅の、本当に民家の平屋の和室で並べて、そこにギャラリーとして販売をして、定期的に南伊豆町内でのポップアップストアを開催して、で、必ず南伊豆町へ足を運ぶというふうな形をとる、南伊豆町へ来てもらうっていうふうな形をとって繋げてくれるように自分からの手売りを基本としています。

このような感じで購入してくださったお客様から着用した、今ちょっと（スライドに）映ってるんですけど、写真は大体自分で皆さんが撮ってきてくださって、メールでくださってそれをSNS上で皆さんに見てもらう。お客様たちがプロデュースをしてくれる形をとっています。

今はですね、IZUBLUEの展開と並行しまして、地元の漁師さんたちとコラボしたTシャツだったりとか、真ん中に写ってる下田中学校のサッカー部の練習着だったりとか、企業さんとのコラボをしたりとか、オリジナルのウエアを作ったりとかで地元の人たちのちょっと素敵になるサポートもしております。

このIZUBLUEという言葉で、伊豆っていう言葉がどんどん外に出ていくっていう形で、またさらに多くの人を伊豆半島へ、そして南伊豆町へ来ていただけるっていう、好きになってほしいっていう思いも込めております。

今回このお話をいただいたときに、昔から私がこの伊豆にいて、南伊豆町にいて思ったことをちょっと思い返してみたんですけど、埼玉に住んでる頃、夏は父のお休みのときにずっと車で帰省をして、サザエをたくさん買って、伊豆縦貫道もなくて、ひたすら修善寺から沼津の東名まで下道を走ってずっと行った思い出とか、伊豆半島に引っ越してきてから伊豆縦貫道が通ったりとかの移り変わりとか。清水に住んで伊豆を外から初めて見たときに、すごいブランドだなっていうことに気付いて、伊豆出身っていうだけで本当にブランド化されちゃってなんか自分がこんなとこ住んでたんだっていうのを本当感じることができたんですね。そういうところから、やはり改めてこの南伊豆町に住んで本当良かったっていうのを実感しております。

それで今後なんですけど、このIZUBLUEで、微力ながらも私がこう発信できることで、もっともっとこの地域の良さを広げていきたいと思っています。

いつもお客様に御購入いただいたときに必ずお礼の言葉を言うんですけど、引き続きIZUBLU

Eの応援をお願いしますっていう言葉を入れるんですけど、イコール南伊豆町をお願いしますっていう気持ちで、私はIZUBLUEを展開しています。ありがとうございました。

【発言者4】Good afternoon,Ladies and Gentlemen.

今、御紹介にあずかりました南伊豆地域おこし協力隊の発言者4と申します。

まず初めにですね、私の自己紹介の方からざっとさせていただこうと思います。

1992 年 11 月 18 日にマドリードで生まれました。父がシアトルですね、アメリカの出身で、母が葛飾ということで東京出身で、帝釈天の方でですね、七五三をあげたりとか、小さい頃、太鼓の練習をしたりとかお祭りが大好きで、葛飾で育ちました。1994 年から、公立の小・中学校に行きながらバイリンガルな家庭で育ちました。中学校卒業後からですね、父の実家であるシアトルの近郊にマーサアイランドハイスクールっていうところがありまして、そこにバスケ留学でですね、私と妹と母とで3人で留学しました。2014 年になりますと実家が英会話学校でして、そこでの英会話講師を務めながら、その後はですね、あのもう家業がちょっときつくなったというか、両親とうまくいかなかったところとかもあって、バックパッカー生活ですね、自分の世界を見る目を広げようということで、海外生活だったりとかを行いました。2018 年に日本に戻ってきまして、伊豆の国市にあります大仁農場、自然農法の大学校でですね、営農について2年間住み込みで勉強しました。

そのときにですね、伊豆の国市ということもあり、私が海だったりとか山が大好きでこちらの下田の方だったりとか、南伊豆の方に観光でまず初めに来たんですけれども、自然農法の大学校を修了後にですね、カヤックのガイドの仕事の依頼がありまして、南伊豆町の弓ヶ浜にベースの会社がありまして、それをきっかけに南伊豆町に漂着したという感じですね。

それ以降なんですけれども 2021 年から地域おこし協力隊として採用いただいて、役場の方の地方創生室というところでですね、室長のもと、今活動させていただいております。

そこに具体的に何に関わっているのかなんですけれども、こちらの地域おこし協力隊はプロジェクト型といって、もう既に業務が決まっているといいますか、南伊豆町の中でも伊浜という場所でですね、元々国道がマーガレットラインと呼ばれているとおり、マーガレットの一大生産地であった所なんですけれども、南伊豆町の波勝に位置して耕作放棄化された海を臨める険しい段々畑のマーガレット畑がありまして、そちらの方を開墾して無農薬のレモンの栽培に挑戦しております。

そちらの方の活動では、年に2回開催してます「レモンでも植えよう会」と、「リモーネプロジェクト」っていうのがありまして、ここ波勝の景観を良くし、産地化したくて春と秋に植樹と作業を行っ

て「トコリンピック世界大会」っていうのが、実は伊浜で行われておりまして、ギネスブックにも載ってます。世界最長のところてんを作って、109mだったと思うんですけど、完食までしなきゃいけないっていうギネスだったんですけれども、トコリンピック世界大会というのもあり、共同で開催をしたりしました。

それ以外の活動なんですけれども、この波勝崎という所は今レモンを植えてるんですけれども、静岡県全土で見られてると思うんですけれども、やはり鳥獣被害があったので、今後、北条の周りであったりとか、各地域でのその鳥獣害対策について、ちょっと何かできればなと思って、わなの免許を取得しました。あと下田高校の女子バスケットボール部ですね、アメリカにいたときに培ってきたバスケで、外部コーチとしてですけれども、また冬に県大会を控えておるんですけれども、そちらの練習の方も出ながら、あとは会話コミュニケーションクラスといって、それこそ地方創生の方で、南伊豆の皆様を中心とした、英語でのコミュニケーションというクラスの方の講師も務めさせていただいております。それ以外にはジオガイドの3級を今回取らしていただきまして、ネイチャーガイドですね。経歴上、英語でも日本語でもできるので、元々このガイドの仕事なんですけれども、雪山のスキーとスノーボードのインストラクターをやったりとか、こちらに来る前、農業大学校に行ったときは富士山の山岳ガイドとかも務めていた経験もあるので、ネイチャーガイドですね。先ほどおっしゃってましたけど世界遺産というね、皆さん普段ではなかなか感じないところかもしれませんけどすごい美しい所に住んでいて、いろんな方に美しい所を紹介できればと思って。あとは地元も忘れずといいますか、南伊豆町消防団の第3分団にも今年から所属して、あとはSDGsをテーマにしたワークショップの講師もさせていただいてます。

では、伊浜での生活とこれから、今取り組んでいるプロジェクトの展望だったり、ゴールと意図について話していきます。

まずゴールの方のお話をします。

今のゴールはですね、今のゴールはとりあえず伊浜のことについてお話しするんですけれども、耕作農家を増やしていくのと、国際色もある移住者の増加で、レモンとジビエの産地化とSDGsをテーマにしたコミュニティ作りと、地とともに生きるっていうライフスタイルっていうところがまず一つの大きいゴールがあります。ここでもですね、今伊浜に初めてこのレモンのプロジェクトで一石を投じさせていただいたんですけれども、今現在では南伊豆では5人の地域おこし協力隊がいるんですけれども、例えば北海道の東川町では 51 人の採用があったりとかしてですね、そこで酪農であったりとか地域の産物を個人でなく複数人でチーム作りをしてるんですけれども、そこで今後の

ゴールとしても、耕作農家さんを増やしていきながら、チームとして団結して産地化であったりとかっていうことができればと思ってます。

もう1つのゴールがですね、ゲストハウスの運営となっております。

伊浜の方では昔昭和 30 年代、40 年代、とても民宿が盛んだった時期があるんですけれども、今はどうしても民宿が1軒、2軒しかございません。なので、そこで観光に来たい、そこに行ってみたいんだけど泊まる場所がないっていうところがやはり問題かなって思ってるのと、ゲストハウスを運営して、人が泊まりたいとか、農作業体験だったりとか、ここの地で風を感じたいとかっていう、泊まれる場所が提供できればと思っているのが、もう1点あります。

あとは、先ほどと少し重なりますけど、南伊豆を中心としたネイチャーガイドですね、英語、日本語を通じて、やはりここの美しさ、魅力っていうところを日本語と英語でいろいろやっていけたらなっていうふうに思ってます。

あともう1つのゴールなんですけれども、農作業をしてみたいだったりとか、田舎暮らしがしてみたいだったりとかっていう感じで移住してくる方がいらっしゃると思うんですけれども、あとはワークアウェイだったりとか、ワーキングホリデーというビザを使って海外から来られてる観光客の皆さんが泊まれる場所ですね、一緒に来てボランティア活動をしたりとか、移住体験をしてみて、住んでみたいなっていうところへの橋を架けるということで、移住のコンサルタントもできればなっていうふうに思ってます。

次に、そのゴールを挙げた意図について、ちょっとお話しさせていただこうと思います。

まずはたくさんある耕作面積を拡大して、段々畑の修復と管理ができて、獣害対策や、さらなる畑付近の土砂崩れなども防ぐ処置ということができればと思います。

今耕作してる所もですね、土砂崩れ危険区域っていう所に入ってるんですけれども、やはりどうしても手付かずの状態が長く維持されてると、自然災害とかにも影響を受けやすいっていうことなので、実際に管理ですね、人の手がもっと入って管理をしてですね、その土地の良さっていうのを、代々受け継がれてきたものを次の時代に継承していくっていうところで、宝の持ち腐れにならないように、段々畑をたくさん補正していければと思ってます。

あと土地の恵みから営むサステナブルな自給自足と、シェアコミュニティライフの実現と、持続的な地域活性も意図しているところでもあります。

あとは様々な活動の中での、より人がアクセスしやすい所にしていくことによって関係人口の増加であったりとか、空き家の活用っていう部分でも、そうですねそういった意図もあります。

今回のスライドの最後になるんですけれども、川勝知事がおっしゃったように、南伊豆では57キロですかね、沿岸があるという中で、海の幸をいただく漁業の邪魔にならないような観光手段ですね。今南伊豆町では高良地区があるんですけれども、そちらの方では漁業がありながら、シーカヤックであったりとかっていう周年を通して楽しめるマリンスポーツが楽しめる漁港が1つあります。

なので、その集落単位で年間を通して、漁業以外のですね、観光手段、シーカヤックであったり、SUPだったりとか、それこそサーフィンだと思うんですけれども、その海っていう部分の、集落にもしっかりサステナブルな収入を得るようなシステム作りと、あと、下田は開国の町でもあるということなので、少しずつですね、漁港のいろいろな有効活用の仕方だったりとかっていうのも意図があります。

こちら最後のスライドになるんですけれども、今週の土曜日ですね、南伊豆にあります青野川ふるさと公園という所で「ハーベストフェスティバル」という名を使わせていただいて、地元の農家さんのファーマーズマーケットや飲食店などの多数の出店を集い、さらに新米ですね、こちら愛国米になりますね、を使った綱引きや実りの秋を祝う盆踊りなどを開催します。こちらは今のところ、出店者さんは 20 店舗以上ありまして、今ちょっと天候が不安なところもあるんですけれども、このようなイベントも実施していきたいと思っておりますので、もし御都合が合う方は、是非遊びに来ていただければと思います。

以上をもって発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【川勝知事】下田のおふたりのお話を聞いて非常に感銘を受けたんですけど、いやあ、南伊豆町はそれに勝るとも劣らないですね。プレゼンを聞いてですね、すごいなと思いましたね。

まず発言者3さんですけども、いい会社ですね。つまりこういう副業を認めてくださってるわけでしょ、そういうですね、社風がいいじゃないですかね。

自由にやらせてもらっているところがあって、そしてIZUBLUE、これTシャツから始まって、そのIZUBLUEでいろんなものができると。IZUBLUEのTシャツからあるいは、さっきの運動選手のですね、ユニフォームっていうか練習着とか、全部そのIZUBLUEでそろえると。例えば焼津も魚河岸シャツってあるじゃないですか。だからこの賀茂地域ではですね、IZUBLUEは南伊豆ブルーっておっしゃってなかったわけですから、IZUBLUEなんですよ。

ですからですね、あのIZUBLUEシャツっていうのがですね、魚河岸シャツと並び称されるとか

ね。一応静岡県でもサムライシャツというのを作ってますけど、全然人気がなくてですね。

夏用にどうしたらいいかってことで、こういう毛織物ですからね、暑いでしょう。これヨーロッパ、北海道より北の所で生まれた服装ですから、これは冬には良いけどですね、夏に向かないですよ。ですから、夏に地元のものをどうしたらいいかということで、例えば市役所とか町役場でですね、働く場合には無礼な服装では具合が悪いから、それに応じた形ですると。例えばスポーツも、あるいは様々な団体もですね、IZUBLUEということで統一されてるってことで、そうすると何て言いますか統一感ができて、発言者3さんのそういうのを応援している会社もですね、株を上げて。

さっき発言者2さんがおっしゃってた副業という言葉。この繁忙期とそれから閑散期どうするかっていったときに、副業というのを文字どおり生かしてるじゃないですか。これは、その意味でアパレルが好きだと、好きこそものの上手なれで、それでいろんなものがおできになるわけですね。

だけど、基調になってるのは、この海と空のブルー、伊豆ブルーだと、美しいからと。美しいからっていうのがこのハートにあって、埼玉県、あるいは清水区で暮らしてですね、ここを見て、ここは文字どおりジオパークですから、ですからもう世界中の財産なわけですね。その伊豆ブルーということで表現したと。

空の青、海の青、これをですね、シャツとか身に付けるもので表現する、その技術を持っている方がここにいると、さらにお勤めの会社が応援してるということでですね、これは、いい副業の南伊豆における好事例であると思いました。

I'm very much great impressed by your presentation. この方、最初英語で挨拶されて、その後もうこれ聞いたらば、もう全く癖のない日本語ですね、そして何でもできるなということで、万能選手ですね。

生まれはマドリード、育ちはシアトル、帝釈天で産湯を使い、姓は〇〇、名は〇〇、人呼んで万能の〇〇と発します。こんな感じで、何でもできるこういう人がですね、こちらにいてくださるのは本当にありがたいですね。

偶々、カヤックしに来た。この方はバスケットで 190 センチあるんですよ、さっき身長聞いたら。シアトルでバスケット留学してた。よほどレベルが高い選手だったんでしょう。

ですから、今、下田高校の女子バスケットボールでですね、コーチをされてるってことですが、それだけじゃなくてカヤックですから海のスポーツにもたけてらっしゃると。

しかも大仁のですね、自然農業、これで2年間きっちりやったと。土とともに生きるっていうこれはもう、人間が本来するべき基本的な姿で、それをですね、体でその重要性を知ってるから、これ

を南伊豆で生かしていこうと。南伊豆と言えば、マーガレットじゃないですか。マーガレット、これはですね、しかしながら、このもっと他にできる、その段々畑ができると、それで、レモンっていうことでですね、そしてジビエと出てきたのでレモン汁絞ってですね、味が上がるなと考えてらっしゃるなということですね。

そして、お客さん来られたら必ず泊まるところが必要だから、ですからこれはもうゲストハウス、全部繋がってますね。

そして国際色豊かなとおっしゃいました。静岡県には 127 の違う国と地域の人たちが住まわれております。何万人という人から何人というレベルまであるんですが、一切差別をしないと。これは富士山が万人の山であるのと同じようにですね、もう全ての人たちが相和してる、大いなる和をなしている、つまり大いなる和と書けば大和ですよ。訓読みすれば、やまとでしょう。

和というのは足すことですから、いろんな人が来て、なおかつ調和しているというのがですね、本当の国際色ですね、多文化共生です。そういう地になるところだと。大体この伊豆半島それ自体が南海からの贈り物じゃないですか。島ですから、外から来たもので、そしてこれを最初に見抜いて、ここは本当に素晴らしいと言ったのは、文豪　川端康成でしょう。

伊豆はこれ日本の歴史の縮図だと、文化がもう縮図だと、これ全体が一大公園だと言ったわけじゃないですか、本当にジオパークになったじゃないですか。そのジオパークガイドの資格まで持ってらっしゃるんですよ。こんな人はなかなかいないですね。

ですからこの人を大事にすることがですね、南伊豆の発展の、大きな、何て言いますか原動力になるんじゃないかという強い印象を持ちました。

ですから、彼を皆で支えながら、地域おこし協力隊はですね、3年ぐらい使って、それはもうとんでもない話で、30 年ということですね。

もう十分にですね、そういう可能性を持って夢と実力を備えた方がここにいるということを我々今知ったのは、非常に嬉しいことですね。賀茂地域全体にとって嬉しいこと。

それはまたこの自然が豊かであるということですね。やっぱり一方で交通網がありますから、ここはですね、県や市や、あるいは関係団体が一緒になってですね、交通網で来やすい所にということもあります。

それからですね、実は移住してきてる人たちがですね、コロナ禍になって 2020 年、2021、22 年と数字が出ました。そして 2020 年、3年前はですね、これは 1,400 人ぐらいが移住してきたんですよ。そのうち 81.7％、5人に4人以上が 30 代前後の子育て世代だったわけです。そして

2021 年になりますと、それがですね、500 人増えて 1,900 人ぐらいだったんですよ。この 83%以上が 30 代前後だったんです。去年 2022 年はですね、これ 2,600 人だと。700 人増えたんですよ。そしてこの83．6%が 30 代前後の人なんですよ。子育てをしたい人たちがですね、一番お金のかかる人たちが、子供をこういうところで育てたいという人たちが、その数字に表れてるわけですから、そういう人たちを受け入れられるようにしなくちゃいかんと。

そしたらそれはですね、日本人とか首都圏の人とか関係なしに、来たい人は拒まない、助力は惜しまない。そしてもうしっかりとですね、働く場を作って差し上げて、そして未来に希望を持ってですね、この大地とともに生きられるという、そういう地域を作っていけると。

やっぱり伊豆に来ればですね、石廊崎といいますか、最南端まで行かないとですね、伊豆に来たっていうことにはならないと。これ実は、先ほど岡部町長に教えていただいたんですが、伊豆に来るってことは、最南端の石廊崎から太平洋をばっと見ることだと、そこまで行かないと伊豆に来たことにならない。

「伊豆を見て死ね」と。「ナポリを見て死ね」って言葉がありましたけど、ただそのIZUBLUEというのをですね、見に行こう、楽しもう、そしてそこは人を受け入れてくれるということで、そして崖崩れの所、過去の山崩れの所があるとおっしゃった。これはですね、先ほど行ってきた、変わった名前のドローンの会社がありまして、そこでドローンもやってくれますよ。どこが一番危ないんだろうということで、そういうことで人を助けたいという人たちばっかりですから。先ほどお目にかかってきた社長さん、そういう人です。人助けをしたい人が、そういう人がここにいる。

それからすごい会社も、実はこちらでつい数年前にオープンしました。社長が来てましたよ、すごい元気でした。それここに作ったんですね。

そういうこともありまして、今、ミッシングリングがいくつかありますけれども、これが完成するとですね、賀茂地域は大きく変わる。その予兆を発言者3さんと、そして発言者4君のですね、お話を聞いて感じた次第でございます。

この4人、もう四天王ですね、ありがとうございました。

【発言者2】すみません。今YouTube配信を御覧の方からちょっと連絡入ったんですけども、マイクが入ってなかったみたいで聞きとりづらかったと。会場の方、聞こえましたか。大丈夫でしたか。

すみません、マイクも握れない男ですけども、すしだけは握れますので、カウンター越しでしたらもうちょっと流ちょうに話せますので、まずはお店の方、僕を呼んでいただければと思います。あり

がとうございました。

【傍聴者1】こんにちは。南伊豆町のウミガメ保護監視員をしている傍聴者1と申します。

今日はですね、川勝さんに静岡県内の海岸に上陸、産卵をするアカウミガメの保護内容について、この後御確認をいただきたいと思って、ちょっとお話しさせてください。御確認をお願いしたいのは、伊豆半島のアカウミガメではありません。私が御確認をお願いしたいのは遠州灘、特に浜松の中田島砂丘で行われているアカウミガメの子ガメの放流会の内容について、現場で行っている内容を一度ちょっと御確認いただきたいなと思っております。

浜松は 40 年前からNPO法人さんが長年頑張ってアカウミガメの保護活動をしていらっしゃるんですけれども、これまでもいろんな賞を受賞して活動していて、2013 年には静岡県知事からも表彰されてるので、川勝さんもしかして御存じかもしれません。

ところが、今その NPO 法人さんが実施している保護活動の内容について一部ちょっと疑問があります。これからざっくりとお話することは日本ウミガメ協議会っていう会が日本にありますけれども、そこにも確認して、私も同じ考えということでお話しさせていただきます。

その内容なんですが、卵から生まれてきた子ガメを、昼間に人間の子供たちに子ガメを放流体験させていくっていうことやってらっしゃるんですが、これはちょっと問題ではないかなと考えてます。内容はですね、夜に卵から生まれたカメを翌日の明るい時間まで約 12 時間ぐらい施設内に留め置いて、そのあと観光客や子供たちに海岸からカメを放流させているという内容です。詳細は割愛しますけれども、アカウミガメの子ガメは必ず夜間に生まれます。子ガメたちは手足をバタバタ動かして泳げる時間がおよそ 24 時間しかありません。で、その後ぱたっと動かなくなってその 24 時間以内に沖合を流れる黒潮に乗らないといけないんですね。彼らはその黒潮に流されてアメリカのカリフォルニア沿岸まで、4年から6年かけて流されてます。そしてそこで成長して、30 年後に日本に戻ってというふうな生態を持ってます。黒潮に乗れず沿岸部に留まってしまった子ガメたちは、肉食の魚や海鳥たちに捕食されて命を落としているという感じです。

なので、24 時間しか泳げない子ガメの生態を考えないといけないんですが、それを無視して、卵から生まれた子ガメを 12 時間ぐらい保護施設内で留め置いて、その後人間たちが活動できる昼間に放流をするっていうことが問題になってるんじゃないかと考えています。

浜松の NPO 法人さんが活動を始めた 30 年前は、それでよかったんです。なぜならウミガメの生態がそうはわからなかったからです。今は生態が少しずつわかってきて、こういうことはしていけ

ないとウミガメの研究者、日本だけじゃなくてアメリカとか世界の研究者が警鐘を鳴らしています。環境省のウミガメガイドブックにも書いてありますし、日本ウミガメ協議会のホームページにも書いてありますが、残念ながら浜松ではそれが行われて、現在は日本最大規模で実施しています。

放流された子ガメたちを、例えば人間の子供たちがテレビに出ます。「ウミガメさん帰ってきてね」っていうふうに声をかけて送り出しているんですが、そうやって半日近く施設内に留められたウミガメたちは既に 12 時間、もう生きるチャンスをロスしているということです。それだけ生き残るチャンスが半分に減っています。それを子供たちがやってるのは私一番大きな問題じゃないかなと思っています。子ガメの保護ではなくて実は子供たちが子ガメを苦しめている活動をしてしまってるんじゃないかということです。

これまでも日本ウミガメ協議会は子ガメの放流会の改善を浜松の NPO 法人さんに申し入れていますが、残念ながら、話し合いは平行線のままです。海岸の使用を許可している静岡県としてはその浜松で実施されているアカウミガメの子ガメの保護内容について、今一度御確認をいただきたいというふうに考えてます。まずは日本ウミガメ協議会にこの浜松のことを御確認いただくのがいいんじゃないかなと思ってます。

今回私がチャンスがあれば川勝さんにお話ししますっていうことですね、日本ウミガメ協議会の会長、四国水族館の館長なんですけども、その方にもお話しして、チャンスがあれば川勝さんにお伝えしますということも言ってありますので、私が今話した内容はウミガメ協議会の会長も同じ考えということで同意を得ています。あと、南伊豆町、私が生活している南伊豆町ではですね、教育委員会との話でもう子ガメの放流会はやりません。昔やってましたが今はやりません。お隣の下田市は海中水族館の専門家の方々が見ているので、ずっと放流会はしておりません。去年、御前崎市もこういう子ガメの放流会をやめました。ホームページにちゃんと書いてあります。牧之原市もボランティアさんがやってて放流会やってません。

ウミガメ業界としてですね、伊豆半島はウミガメの辺境の地なんですね。そんなにたくさん来るところではありません。静岡県で最大のウミガメの大都会は遠州灘です。遠州灘がこういう状態なのが、辺境の地に住むウミガメ保護監視員としてはとても残念です。浜松のように大規模に放流会をしてるところは日本で他にありません。浜松だけです。あと浜松の他は、隣の磐田、袋井、掛川はその NPO 法人さんがウミガメの保護を見ているので同じ状態になっています。

なので、静岡というと子ガメの放流王国みたいな感じで他の県の方々が言われることがあるんですが、なかなかわからなかった子ガメの生態が今わかってきたので、浜松の NPO 法人さんが今

までやってきたことは素晴らしいことだと思うんです、海岸に車を入れないようにするとか。ただ新しい生態がわかってきたならば、それに合わせた活保護動をしていってもらうべきかと、県としてもそういうところを浜を使用する許可を出すときにお願いしてもらえないかなというふうに思います。集まり散じて人は変われど、目指すは同じウミガメの保護と子供たちへの正しい教育だと思っておりますので、御検討お願いします。

【傍聴者2】私南伊豆町の身体障害者福祉会会長やってます傍聴者2といいます。

伊豆縦貫道の話が出ましたけれども、これからですね、電気自動車の時代になると思うんです。電気自動車の時代になりますと、南伊豆町とか下田市っていうと、道路が狭いですので、軽の電気自動車になります。

普通車の電気自動車ですと、県立のがんセンター辺りまでは往復ができます。ところが軽の電気自動車になりますと、がんセンターまで行っても戻ってくるまでにもう1回充電しなきゃいけません。県立のがんセンター辺りだと電気自動車の充電器はあります。ただし高速の充電器がないんです。高速の充電器がないと、かなり充電をするのは時間がかかるもんですから、往復で1日がかりになっちゃいます。だから、県のそういう施設に高速の充電器、電気自動車の普及を考えて、設置をお願いをしたいなと思うんです。

もう一つ、町の会長やってますので、静岡とか、いろんなところへと会議で出て行きます。それで、出て行くのに対して、駐車場がないから、公共交通機関を使って来てください、こう言われます。

特に静岡駅からタクシーを使って会場までは行けるんですけれども、今度帰りのときにその施設にタクシーの乗降場がない所なんていうのが見られますので、そういうことも検討をお願いしたいなと思います。以上です。

【傍聴者3】下田に住んでおります傍聴者3と申します。

7年前に下田で子育てをしたいなと移住してきたんですが、まさに先ほどお話しされていた、土とともに生活することを目指してトライしている者です。

PTAの市の代表をやらせていただいているんですけれども、やっぱり通学路、多くの子供が通る通学路にかなり危ない所がありまして、個別にいろいろと市ですとか、警察にかけあったりして、先日行われた下田市長さんとの対談会みたいなところでもお話させていただいたんですが、なかなか言っても、こっち行ってくれあっち行ってくれ、警察行ってくれ、役所行ってくれ、県の方に言っ

てくれでなかなか進みが遅くて、実は先日その一番危惧されていた通学路で、ちょっとした事故がありました。やっぱりこういったものを、危険な所をどんどん潰していくというのをなるべく早く、早い時期でやっていただきたいなというところを市長さんにもお願いしたんですけれども、知事さんにも是非というところで今日発言させていただきます。

あとですね、皆さん保護者の方が言ってるのが給食の無償化どうにかならないのかなあということをいろんな方から聞いています。その辺のことも、もし県の方として何か動くことができるのであれば是非お願いします。

以上です。

【川勝知事】南伊豆の傍聴者1さんですか。どうもありがとうございました。

アカウミガメのですね、生態というのを、詳しく教えていただきまして、ありがとうございました。

南伊豆から始まり、そして下田、最後に御前崎と、順次、そういう子供による子ガメの放流っていうのをやめてきたと、浜松はまだわかってないんじゃないかということでございました。アカウミガメを保護するために子供たちにもという善意で行われてるんでしょうけども、結果的にそれが子ガメにとって、あるいはアカウミガメ全体にとってですね、マイナスになってるということは非常に重大なことですので、しっかり受け止めまして、すぐ調べます。ありがとうございました。

それから傍聴者2さんですね、電気自動車あるいはこれから水素自動車も出てくるというふうに思いますが、CO2 をなるべく出さないで、公共交通機関をしっかりと維持するということですから、これから電気自動車ってことであれば、充電器が必要だったらもうそのとおりだと思いますね。

それから公共交通機関、こういうところから使うのはなかなか大変ですよね。ですから、そういうことについての配慮が足りないという御指摘は誠に申し訳ありません。そういうことのないようにですね、したいと。関係部局交通基盤部含めて、健康福祉部を含めてですね、こういう遠いところから来られるという人がいるってことを知って、そのときに無礼な発言はしないと。その人たちの立場に立って、その移動が不便なくできるようにしなきゃいかんというそれを共通理解にしたいというふうに思います。

傍聴者3さん、いい名前ですね。

10 年前に移住してくれて本当にありがとうございました。子供さんのためにってことがあって、

今PTAということで御活躍されてるのは何よりです。やっぱり交通事故があってはいけません。交通事故によって悲劇がないようにしなくちゃいけないと。危ない所がわかってるってことであれば優先順位をつけなくちゃいけないと思いますけれども、これで今日賀茂地域局長も聞いてますし、そしてうちのトップの意思決定者も聞いて、私も聞きましたので、市長さん、首長さんもおそらく場所をわかってらっしゃると思いますから、まずは応急措置でもいいわけですね、危ないところを危なくないようにして、子供たちが通学できるようにすると。これ基本でありますので、遅れてる所があれば、ここですというふうに言っていただいて、さきに事故が起こった所、そこはまずですね、まずそこから手をつけて、二度とそういうことがないようにするというのが基本ですね。そういうつもりで担当の方にですね、伝えますので、遠慮なく言ってくださるように、子供たちのためですからね、よろしくお願いいたします。

本当にですね、今日は最後に会場からきちっと伝えるべきことを持ってきてらっしゃる方がいて、一方でですね、この若い世代の人たちが、将来に向けて夢を語ってくださいました。同時に今抱えてる課題についても言っていただきました。

全体としてこういう若い人たちを迎え入れて、そしてその人たちに手を貸そうという、そういう地域の風土がありますね。挑戦する青年たちを応援していこうという、これは岡部町長また松木市長さんのね、基本的な姿勢でもありますので、それも確認できてよかったと。

ですから一緒に未来を作っていく、「未来を創る」というのがですね、下田中学校の新しい学校の大方針、校訓となったことも、あわせまして、一緒に未来を作ってまいりましょう。

本日は最後までお聞きいただきまして、本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

今日「平太さんと語ろう」の、このポスターに、下田中学校の美術部の少年少女たちがですね、波と、それからキンメダイを描いたものを作ってくれました。少年たちが、少女たちが応援してくれてるんですね、それを一言申し上げます。ありがとうございました。